

意見文 一（五百字） 十二本

一日一本。読み終えたら、本文のすぐあとの課題欄に書きこもう。

第一回 雑草

第二回 竹と櫨

第三回 自転車の練習

第四回 料理の味つけ

第五回 森の木

第六回 クラスの係

第七回 検索と自分で考える

第八回 公式と理由

第九回 ガイドブックと旅

第十回 レシピと料理

第十一回 翻訳機と外国語

第十二回 計算機と暗算

第一回 雑草

道ばたや空き地、アスファルトのすき間。人が手入れをしない場所にも、雑草はいつのまにか生えてくる。抜いても抜いてもまた生えてくる雑草を見て、「雑草は強い」と感じる人は多い。では、強いとは、どういうことだろうか。

一般的に、強いとは、太く、硬く、大きいことだと考えられている。強い植物といえば、太い幹を持ち、大きく枝を広げる大木を思い浮かべる人が多いだろう。ほかの植物より高く育ち、日の光をひとりにめにする。そういう植物こそ強いのだと、多くの人は考える。

ところが、本当に生き残るのは、折れずに形を変えるもののほうだ。硬いものは、思いがけない大きな力に一度で折れてしまう。いつぼう、しなるものは、その力を受け流すことができる。雑草は太くも硬くもない。けれども、踏まれれば低くはい、刈られれば根もとからまたのびる。周りに合わせて形を変えることで、雑草は生きのびているのである。

つまり、雑草の強さとは、大きさや硬さの強さではなく、変化に合わせる強さである。大木のように高くならなくても、雑草は雑草のやり方で生き残っている。本当の強さとは、こわれないことではなく、変わりつづけられることなのかもしれない。

課題一 筆者の主張を一文で書こう。

課題二 一般論の段落は何段落目だろう。() 段落目

第二回 竹と櫓

強い風がふく日に、竹林を見たことがあるだろうか。竹は、大きく曲がりながら、風をやりすごす。風がやめば、また何ごともなかったように立っている。いっぽう、硬くて太い木が、風でたおれたり、えだを折られたりすることもある。強いとは、どういうことだろうか。

ふつう、強いとは、太く、硬く、大きいことだと思われる。櫓は、とても硬い木だ。木のなかでも重く、道具の柄や木刀に使われるほどじょうぶである。多くの人は、曲がらない櫓のような木こそ強いと考えるだろう。

しかし、折れずに形を変えるもののほうが生き残る。硬いものは、思いがけない大きな力に一度で折れてしまう。いっぽう、しなるものは、その力を受け流す。受け流せば、力はそのまま通りすぎていく。竹は中が空どうで、櫓のように硬くはない。けれども、風がふけば大きくしなり、風がやめばまたまっすぐにもどる。力に正面からさからわず、受け流すことで、竹は折れずにすむのである。

こう考えると、本当の強さとは、硬くて曲がらないことではない。大きな力を受けてしなり、また元の形にもどれること。それが、折れない強さなのである。竹は、硬さではなく、しなやかさによって風に勝っているのである。

課題一 筆者の主張を一文で書こう。

課題二 一般論の段落は何段落目だろう。() 段落目

第三回 自転車練習

自転車に乗れるようになった日のことを、覚えているだろうか。何度も転んで、ひざをすりむいて、それでもまた乗る。それとも、まだ練習のとちゅうだろうか。あの転んでばかりいた時間に、意味はあったのだろうか。

多くの人は、失敗はさけるべきもので、成功だけに価値があると考え。転べば痛いし、時間もむだになる。転ばずに一度で乗れるのがいちばんよい。できることなら転びたくない、と思うのは自然なことだ。転ばない子はえらく、転ぶ子はへたなのだと、つい思ってしまう。

けれども、失敗とは「うまくいかない方法を一つ見つけた」ことである。ハンドルを切りすぎて転べば、「切りすぎるとたおれる」とわかる。下を見て転べば、「前を見たほうがよい」とわかる。転ぶたびに、体はうまくいかない方法を一つずつ覚えていく。反対に、転ぶのをおそれて乗らなければ、転ぶことはない。けれども、それは、できることしかしていないということだ。それでは、いつまでたつても乗れるようにはならない。

だから、転ぶことは、乗れるようになるまでの回り道ではない。転ぶことそのものが、乗れるようになるための道なのである。転んだ数だけ、乗れる日は近づいている。

課題一 筆者の主張を一文で書こう。

課題二 一般論の段落は何段落目だろう。() 段落目

第四回 料理の味つけ

初めて料理をしたとき、味つけで失敗したことはないだろうか。しょうゆを入れすぎてしょっぱくなったり、味がうすくてぼんやりしたり。作った本人も、食べる家族も、がっかりする。そういう失敗は、ただのむだなのだろうか。

もちろん、失敗はさけるべきもので、成功だけに価値があると考える人は多い。料理なら、レシピの通りに作って、一度でおいしくできるのがよい。材料をむだにして、おいしくないものを食べるくらいなら、失敗はしないほうがいい。多くの人はそう考える。

だが、失敗とは「うまくいかない方法を一つ見つけた」ことである。しょうゆを入れすぎてしょっぱくなれば、次はその量より少なくすればよいとわかる。うすければ、もう少し足せばよいとわかる。失敗するたびに、「ちょうどよい」の場所が、少しずつはつきりしてくる。反対に、失敗をおそれてレシピの通りにしか作らなければ、失敗はしない。けれども、それは、できることしかしていないということだ。レシピにない材料を前にしたとき、その人は何も作れない。

つまり、味つけの失敗は、むだではない。しょっぱすぎた一皿も、うすすぎた一皿も、ちょうどよい一皿への道しるべになるのである。失敗した数だけ、味は確かになっていく。

課題一 筆者の主張を一文で書こう。

課題二 一般論の段落は何段落目だろう。() 段落目

第五回 森の木

山を歩くと、同じ種類の木がきれいに並んだ林と、いろいろな木が入り混じった林がある。前のほうは、人が植えて育てた林であることが多い。後のほうは、自然に育った林であることが多い。この二つのうち、どちらが「強い林」なのだろうか。

一般的に、同じにそろえるほうが効率がよく、公平だと考えられている。同じ木をそろえて植えれば、育ち方がそろい、手入れもしやすい。切り出すときも、同じ大きさの木がまとめて取れる。林を育てる側から見れば、そろっているほうがむだがない。

ところが、違いがあるから、全体が変化に耐えられる。同じ木ばかりだと、一つの病気、一つの変化で、全部がだめになる。その木だけをからす病気や虫が入ってくれば、林は一度に枯れてしまう。いっぽう、いろいろな木が混ざった林なら、その木が枯れても、ほかの木は残る。風に弱い木がたおれても、風に強い木が林を支える。違いが、林全体の命づなになるのである。

このように、そろった林は、一見きれいで効率がよい。けれども、変化に強いのは、違う木が混ざった林のほうだ。違いは、むだではなく、生き残るための備えなのである。そろえることで手に入る効率の裏で、林は変化への備えを失っているのだ。

課題一 筆者の主張を一文で書こう。

課題二 一般論の段落は何段落目だろう。() 段落目

第六回 クラスの係

クラスの係を決めるとき、どう分けるのがよいだろうか。全員が同じ仕事を同じだけやるのか。それとも、得意なことで分けるのか。どちらのクラスのほうが、うまく回るのだろうか。

ふつう、同じにそろえるほうが効率がよく、公平だと思われる。全員が同じ仕事をすれば、だれかだけが楽をすることがない。決め方も簡単で、文句も出にくい。みんな同じなのだから、不公平だと言う人はいないはずだ。公平とは、同じにすることだと、多くの人は考えている。

しかし、違いがあるから、全体が変化に耐えられる。全員が同じことしかできなければ、だれにもできないことが一つ出てきたとき、クラス全体が止まってしまう。絵の得意な人、人前で話すのが得意な人、こつこつ数えるのが得意な人。得意が違うから、一人ではできないことが、クラスとしてはできる。だれかが休んでも、別の得意をもつ人が、別のやり方で穴をうめられる。同じものばかりでは、一つの穴で全部が止まるのである。

だから、得意が違うことは、不公平ではない。違いがあるからこそ、クラスという全体が回る。そろえることより、違いを生かすことのほうが、クラスを強くするのである。

課題一 筆者の主張を一文で書こう。

課題二 一般論の段落は何段落目だろう。() (段落目)

第七回 検索と自分で考える

宿題でわからない言葉が出てきたとき、あなたはどうするだろうか。今は、スマートフォンに言葉を打ちこめば、すぐに答えが出てくる。調べるのに時間はかからない。では、調べて答えを知ることと、自分で考えることは、同じことなのだろうか。

世間では、知識が多い人が賢いと思われている。答えが早く出るほうがよい、と多くの人は考える。検索すれば、だれよりも早く、たくさんを知ることができる。だから、調べる力さえあれば、もう十分だと感じる人も多いだろう。

ところが、知ったことをつなげて考えることこそが、本当の力である。知るだけなら、機械のほうがずっと上だ。検索は、人の何倍もの知識を一瞬で集めてくる。けれども、集めた知識どうしをつなげたり、本当にそうかと疑ったりすることは、人にしかできない。答えを知っただけでは、その答えが正しいかどうか、ほかのことと関係があるかどうか、わからないのである。

だから、調べて終わりにしてはいけない。調べたことを、自分の知っていることとつなげ、本当にそうかと考えてみる。そこまでやって、知識ははじめて自分の力になる。検索が速くなるほど、考える力の値打ちは大きくなっていくのだ。

課題一 筆者の主張を一文で書こう。

課題二 一般論の段落は何段落目だろう。() 段落目

第八回 公式と理由

算数の公式を、あなたはいくつ覚えていたのだろうか。三角形の面積は、底辺かける高さわる二。公式を覚えれば、問題は速く解ける。では、公式を覚えることと、なぜそうなるかを考えることは、どちらが大切なのだろうか。

多くの人は、知識が多い人が賢いと考える。公式をたくさん覚えていて、答えが早く出る人ほど算数が得意だ、と多くの人は考える。テストは時間が決まっているから、理由を考えている暇はない。公式を覚えて当てはめるのがいちばん速い、というわけである。

けれども、知ったことをつなげて考えることが、本当の力である。公式を覚えて当てはめるだけなら、計算機のほうがずっと正確だ。けれども、三角形の公式がなぜ「わる二」なのかを考えると、長方形を半分に切った形が見えてくる。そうやって理由がわかると、平行四辺形や台形の公式も、同じ考え方でつながってくる。公式どうしをつなげて、この問題にはどれが使えるかと考えるのは、人にしかない。

このように、公式は覚えて終わりではない。なぜそうなるかを考えると、ばらばらだった公式がつながり、見たことのない問題にも手が出せるようになる。覚えた数より、つなげられる数が、本当の算数の力なのである。

課題一 筆者の主張を一文で書こう。

課題二 一般論の段落は何段落目だろう。() 段落目

第九回 ガイドブックと旅

家族で旅行に行く前に、ガイドブックを読んだことはあるだろうか。有名な寺や美しい海の写真がならび、見どころが文章で説明されている。では、ガイドブックを読んでわかることと、実際に旅をしてわかることは、同じなのだろうか。

たしかに、本や言葉で知れば、十分にわかると言われることが多い。ガイドブックには、写真も地図も歴史もまとめてある。多くの人は、くわしい本を読めば、行かなくてもだいたいのことはわかると考える。時間もお金もかからないのだから、そのほうが得だというわけである。

しかし、体験には言葉にならない部分があり、その部分こそが言葉を深くする。言葉は、体験を切り取った一部にすぎない。ガイドブックに「静かな寺」と書いてあっても、静けさの中で聞こえる風の音や、石段を上るときの足の重さは、書かれていない。切り取られなかった部分は、自分で行って感じるしかない。そして、実際に行ったあとで同じ文章を読み返すと、「静か」という一言が、まるでちがう重みをもつて見えてくる。

こう考えると、ガイドブックは旅の代わりにはならない。言葉で知ったことを、体で確かめに行く。すると、言葉のうしろにあったものが見えて、言葉そのものが深くなる。旅は、言葉の外にあるものを取りに行くことなのである。

課題一 筆者の主張を一文で書こう。

課題二 一般論の段落は何段落目だろう。() 段落目

第十回 レシピと料理

家の手伝いで、料理を作ったことはあるだろうか。レシピを見れば、材料も手順も書いてある。そのとおりに作れば、だれでも同じ料理ができるはずだ。では、レシピを読んで知ることと、実際に作ってわかることは、同じなのだろうか。

一般的に、本や言葉で知れば、十分にわかると考えられている。レシピには、材料の量も、火にかける時間も、きちんと数字で書いてある。多くの人は、くわしいレシピがあれば、料理はできたも同然だと考える。読んで覚えれば、作らなくてもわかる、というわけである。

ところが、体験には言葉にならない部分があり、それが言葉を深くする。言葉は、体験を切り取った一部にすぎない。レシピには「玉ねぎがすぎ通るまでいためる」と書いてある。けれども、「すぎ通る」がどんな色のことか、どのくらいの時間かは、作ってみないとわからない。切り取られなかった部分は、体験でしか補えない。そして、一度自分の目で見たあとなら、「すぎ通るまで」の一言で、色も、においも、火の強さも思い出せるようになる。

このように、レシピは料理の代わりにはならない。言葉で知ったことを、手を動かして確かめる。すると、言葉のうしろにあるものが見えて、言葉そのものが深くなる。料理は、レシピの外にあるものを身につけることなのである。

課題一 筆者の主張を一文で書こう。

課題二 一般論の段落は何段落目だろう。() 段落目

第十一回 翻訳機と外国語

外国の人に話しかけられて、こまったことはあるだろうか。今は、スマートフォンの翻訳機に話しかければ、すぐに外国語に直してくれる。何年も勉強しなくても、言葉は通じる。では、自分で外国語を学ぶことに、まだ意味はあるのだろうか。

世間では、機械のほうが速く、正確で、疲れないと思われる。翻訳機は、何十もの言葉を一瞬で言いかえる。単語を忘れることも、文法をまちがえることもない。多くの人は、何年もかけて外国語を学ぶより、機械にまかせたほうが得だと考える。

ところが、まちがえ、迷い、時間をかける人間の過程にこそ、意味がある。機械は答えを出せるが、何を伝えたいのか、何のために話すのかは決められない。外国語を学ぶ人は、単語を思い出せずに言いよどみ、相手の顔を見ながら、身ぶりで補う。そのまちがいや迷いの中で、相手が何を聞きたがっているのがわかってくる。翻訳機は言葉を運ぶが、相手とのあいだに何かを生み出すのは、人のほうなのである。

だから、翻訳機があっても、外国語を学ぶ意味はなくなるらない。機械は言葉を正しく直してくれるが、ただただしくても自分の口で伝えようとする時間が、相手との関係を作る。速く正確なことより、迷いながら伝えることのほうに、人にしかない値打ちがあるのだ。

課題一 筆者の主張を一文で書こう。

課題二 一般論の段落は何段落目だろう。() () 段落目

第十二回 計算機と暗算

買い物で、おつりの計算をしたことはあるだろうか。レジは一瞬で正しい金額を出す。スマートフォンの計算機を使えば、どんな計算もまちがえない。では、自分の頭で計算する暗算に、まだ意味はあるのだろうか。

多くの人は、機械のほうが速く、正確で、疲れないと考える。計算機は、けたの多いかけ算でも一瞬で答えを出し、何百回やつてもまちがえない。多くの人は、暗算の練習に時間を使うより、計算機にまかせたほうが得だと考える。

けれども、まちがえ、迷い、時間をかける人間の過程に、意味がある。計算機は答えを出せるが、何を計算すればよいのか、何のために計算するのかは決められない。暗算をする人は、だいたい三百円くらいと見当をつけ、計算してみても、ずれていればどこでまちがえたかを考える。この見当をつける力は、計算機を使うだけでは育たない。そして見当がつく人は、計算機の答えがおかしいときにも、それに気づくことができるのである。

このように、計算機があっても、暗算の意味はなくなるならない。機械は正しい答えを出してくれるが、その答えが正しいかどうかを判断するのは、迷いながら計算してきた人の頭である。速さや正確さより、見当をつけて考える過程のほうに、人にしかない値打ちがあるのだ。

課題一 筆者の主張を一文で書こう。

課題二 一般論の段落は何段落目だろう。() () 段落目